

臓器移植等推進功労者へ副知事が感謝状を贈呈します

広島県では、毎年10月の「臓器移植普及推進月間」及び「骨髄バンク推進月間」にあわせて、臓器移植及び造血幹細胞移植（骨髄移植）医療の推進や普及啓発に貢献された方々に対して、知事感謝状を贈呈しています。

贈呈式の概要

- (1) 日 時：令和7年10月30日（木）11：00～11：15
- (2) 場 所：県庁北館1階 第一応接室
- (3) 贈 呈 者：広島県副知事
- (4) 贈呈の方法：個別に感謝状を贈呈

贈呈対象者

個人（4名） ※各贈呈対象者の功績内容は裏面のとおり

区 分	氏 名
臓器提供協力	本明 慈彦（ほんみょう なるひこ）
造血幹細胞移植 推進活動	藤代 晃子（ふじしろ あきこ）
	田中 真理（たなか まり）
普及啓発活動	藤本 佳孝（ふじもと よしたか）

<参考>令和6年度贈呈式



贈呈制度の概要

「臓器移植等推進功労者に対する知事感謝状」贈呈制度は、平成10年に創設し今年で27回目となります。

贈呈基準

区 分	内 容
臓器提供協力	救命救急センター及び脳神経外科を併設する医療施設等において、臓器提供可能な者に対し提供の意思確認を行い、移植関係機関への情報提供を継続的に行うなど、移植医療に著しく貢献した場合
造血幹細胞移植推進活動	造血幹細胞移植手術の実施などの移植医療に著しく貢献した場合
普及啓発活動	臓器移植及び造血幹細胞移植に関して広く普及啓発活動を行い、県民意識の向上に顕著な功績があった場合
移植希望者のケア	臓器移植及び造血幹細胞移植希望者に対する治療を始めとした移植待機患者へのケアに尽力した場合
調査及び研究	臓器移植及び造血幹細胞移植に関して調査・研究を行い、以後の移植医療に貢献した場合

参考（過去の受賞者数）

個 人	89 名
団 体	14 団体

令和7年度臓器移植等推進功労者知事感謝状 贈呈者一覧

氏 名	年 齢	職 種	選 考 理 由 等
ほんみょう なるひこ 本 明 慈彦 1. 臓器提供協力 (活動歴 11 年)	41	医師	○ 平成 26 年より広島大学病院にて消化器外科・移植外科の臨床経験を積んだ後、大学院では免疫学的視点からの肝臓治療に関する基礎研究に加え、肝切除における許容切除率の定量化に関する研究に従事し、令和 2 年に博士号を取得した。大学院修了後は臨床に復帰し、広島市立北部医療センター安佐市民病院にて肝胆膵外科領域における癌治療に従事。 ○ 令和 5 年に広島大学病院へ再赴任してからは、生体肝移植の技術を応用した体外肝切除および自己移植をはじめとする高難度肝切除術式における肝虚血再灌流障害に着目した研究に取り組み、肝移植医療への応用も視野に入れている。 ○ これまでに 39 例の肝移植手術に携わり、現在は脳死ドナーからのグラフト摘出手術に主要メンバーとして参画し、腎移植および膵移植においても手術ならびに周術期管理に従事している。また、生体ドナーの適応評価や術後ケアを含む診療を担い、安全かつ適正な移植医療体制の構築に注力するとともに、地域医療支援講座において移植医療の普及にも尽力していることから、県内における臓器移植医療の発展に多大なる貢献をしているといえる。
ふじしろ あきこ 藤代 晃子 2. 造血幹細胞移植推進活動 (活動歴 11 年)	47	看護師	○ 平成 15 年から移植病棟である先進治療病棟の看護師として、多くの移植患者の看護を実践してきた。平成 17 年 12 月には、日本静脈経腸栄養学会（現：日本栄養治療学会）において移植患者の栄養サポートに関する研究発表を行っており、移植医療に係る看護に貢献してきた。 ○ 令和 5 年からは、広島大学病院先進治療病棟の看護師長として、多数の若手看護師を日本造血・免疫細胞療法学会の定めるクリニカルラダーに準拠した教育で育成し、院内における移植看護技術の向上に著しく貢献した。 ○ また、最先端の細胞治療であるキメラ抗原受容体 T 細胞が、広島大学病院において広島県で初めて導入された際にも、新たに導入される製剤に対して、安全かつ円滑に医療を提供できるよう看護体制整備に尽力したことから、県内における造血幹細胞移植の推進に多大な貢献をしているといえる。
たなか まり 田中 真理 3. 造血幹細胞移植推進活動 (活動歴 13 年)	40	医師	○ 平成 27 年から 2 年間、東京医科歯科大学（現・東京科学大学）小児科にて、原発性免疫不全症を中心とした希少難治性疾患に対する造血幹細胞移植に携わり、専門的な移植医療の経験を積んだ。 ○ 令和 4 年度からは広島大学病院小児科において、年間 5 ～ 10 例の造血幹細胞移植を担当しており、希少な免疫不全症の患者に対しても、主治医として最前線で治療にあたっている。 ○ また、広島大学病院においては、年間約 10 例の骨髄採取が行われているなかで、骨髄採取医師としても貢献していることから、県内における造血幹細胞移植の推進に多大な貢献をしているといえる。

ふじもと よしたか 藤本 佳孝 4. 普及啓発活動 (活動歴3年)	53	—	○ 高校を卒業後アメリカに渡ってフラワーデザインを学び、その後数々の賞を受賞された。平成11年には、フジテレビフラワーネット全国大会において2年連続優勝、平成12年には世界大会において日本代表として選出された。しかし、世界大会を6か月後に控えたある日、「円錐角膜」と診断された。当時はレーシック手術により大会へ出場したが、数年後再び見えにくい状態となり、角膜移植の手術を決断することとなった。 ○ 自身の経験をきっかけとして、令和3年から献眼の啓発を行っている地域のライオンズクラブや、協力団体からの依頼を受け、「見えることの喜び」、「献眼の必要性」を目的とした講和活動を行っている。講和では、ライフワークであるフラワーアレンジメントを実演しながら、かつて遠近感がつかめず、花の色やアレンジメントのバランスすら取れなかった当時の不自由さ、そして角膜移植によって視界が取り戻された後の変化を、「見せる講和」として伝えている。 ○ その講和は参加者に深い感動を与え、同時に移植医療と献眼の重要性を強く訴えるものとなっている。これまでの活動が果たしてきた功績は非常に大きく、今後の啓発活動においても重要な存在として期待されていることから、県民意識の向上に顕著な功績があったといえる。
---	-----------	----------	--